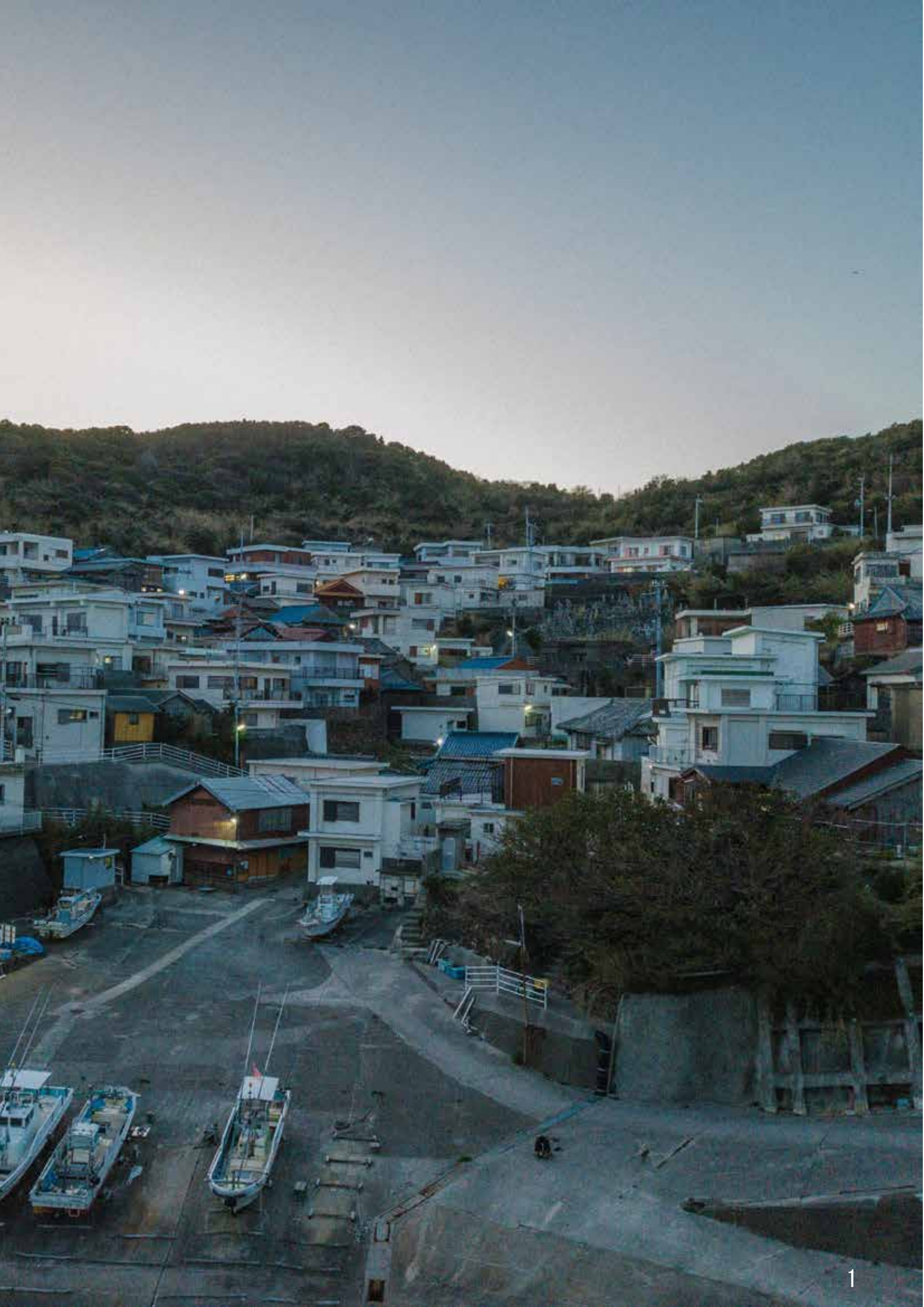


旅する編集学校 卒業文集 vol.1

海と坂のまち・矢櫃で暮らしたら





目 次

- p . 3 松谷政弘さん (漁師)
- p . 5 長谷川信夫さん (矢櫃自治会 班長)
- p . 7 松尾里美さん (ナデシコ会)
- p . 9 松尾勇二さん (矢櫃自治会 会計)
- p . 11 向後周一さん
(有田市ふるさと創生室長)
- p . 13 タネム・ジャスティンさん (教師)
- p . 15 タネム睦子さん (元・教師)
- p 17. 古川元康さん
(国民宿舎くろ潮 社長)
- p . 19 古川浩一さん (矢櫃自治会長)
- p . 21 旅する編集学校について





「海はどうって思ったことないわ。もうしよつちゅう見てるよつて。朝昼晩見とるよつて。」

これには、漁師という仕事に対する松谷さんの大事な気持ちが入められていた。多くは語らないが紡がれるのは、温かい言葉。

彼の目に映る矢櫃は、どのように姿を変えてきたのであろうか。

昔は「オカ」に行く人は

いなかった

遡ること60年ほど前、矢櫃地区はほとんどの人が、何らかの形で漁

業に携わっていた。松谷さん自身も中学校を卒業後は漁師さんになり、おやつさんと共に矢櫃の海で魚をとっていた。

同級生も家業を継ぐ人が多く、矢櫃漁港（通称「浜」）は毎朝大勢の人でにぎわっていた。今でこそ、漁師さんは2人しか残っていないが、当時漁船は40〜50隻ほどあり、浜に上がりきらなかった事もあったそう。

朝、出港してとれた魚は、そのまま浜のすぐ横にあった矢櫃漁業協同組合事務所の前で、仲買さんによつてどんどん捌かれる。新鮮で質の高い「たちちよ」（有田弁で太刀

魚のこと）や鯛、伊勢海老は大阪へ運ばれていった。

漁師さんはもとより、仲買さん、さらには木船を造る大工さんもいて、矢櫃の人にとつて海は生活のまんなかにあった。

松谷さんもよつぽど海がしけている日でなければ、毎日おやつさんと共に海へ出た。小さいころから、手伝っていたとはいえ最初の頃は「酔うて酔うてしんどかった」そう。

父子の関係を尋ねると、船の上でただの一度も喧嘩したことはなく、「（父は）しごくようなことはなかった。兵隊行つて来ちやつたからな。そんなに怒らなんだ」と思い出すように呟かれた。

こうして綿々と紡がれていたあたたく穏やかな日々は、時代や環境の流れと共に徐々にすがたを変えていく。

最近「さかな」ないわ…

多い時で50隻あった漁船は、強化プラスチックの船に切り替わりはじめた30年前頃から少しずつ減っていく、底引き網の漁船はお隣の箕島漁港へと移って行った。そして2008年、ついに矢櫃漁協は箕島漁港に合併されることになる。

ときを同じくして、15年ほど前から少しずつ魚の数が減っていった。「なんでもかは分らない。矢櫃だけではなくて、たぶん日本全国ちゃうか……」と松谷さん。また、子どもの声が坂や浜に響いてほしい。そう願っているが、現状新しく引越してきた人が、かつてのように矢櫃で漁業をなりわいとするのはしんどいな……苦しそうに吐き出されたことばたちに、声に出せない想いを感じた。

「町に出たいと思ったことはなかった。」
優しいまなざしが語る矢櫃の移り変わり。

減ったけれど、ゼロじゃない。

にぎやかな町に戻るにはどうしたらいいか。松谷さんのお話を伺って筆者なりに考えてみた。

矢櫃の海はとてもきれい。そして、
てのひらにくるまれているような温
かい地形と人々。わたしは、ここに
また帰ってきたい。

生きること悩む人がまっさらな気
持ちになれると思うから。

「旅する編集学校」で出会った大切
な仲間や、職場で知り合ったあつたか
い人たちと夏にまた帰ってきたい。松
谷さんにもお会いして、今度こそ漁
に連れて行つて欲しい。わたしは、こ
こ矢櫃を「和歌山のおじいちゃんち」
だと思ふことにした。今、すぐ、と
いう訳にはいかないだろうが、「ただいま」の言える場所にしたい。大切な
人たちと過ごすあたたかい場所。

それが、私が願う矢櫃とのこれから。

取材・文 西塔藍

撮影 太田真里亜



～ Profile ～

松谷 政弘 さん

1937年3月8日矢櫃生まれの81歳。中学卒業後は、すぐに“おやっさん(父)”の船に乗り、以来70年ほど矢櫃の漁師として活躍。生粋の矢櫃人。現在は、海が凧いでいる日にたまにおかずの魚を獲ったり、畑で野菜を育てたりしている。



すり鉢状の地形が特徴的な矢櫃地区。その谷には、かつて漁業で栄えた漁港と長谷川さんの住まいがある。2時間のインタビューでは、「ちょっと寄ってみよか」と

港へ続く坂道を3往復。絶景スポットからゴミ収集地点まで、矢櫃中を歩いて歩いて歩いて……。

「景色が綺麗だけでは語れないな」と日常の矢櫃を実感しはじめた頃、同時に「ここが一番やな、住むには」と、言葉を噛み締めながら答えてくれた長谷川さん。そんな長谷川さんに『矢櫃で暮らしていくこと』について聞いてみた。くてお話を伺った。

坂道と共にある

暮らしと60年の歩み

矢櫃で生まれ育ち、63歳まで地区外の鉄工所に勤めていた長谷川さんの日常は、いつも坂を登ることから始まる。学生時代と社会人をあわせると60年近く、車の通らない急なこの坂と共に過ごしてきた。

「そら、天気良かつたら綺麗やなあつて思うけど、風が強かつたらエライところや。風が吹いたら傘もさせへん」と長谷川さん。ここでは何でも自分たちでするか、助けてもらうしかないという。

インタビュー中に通った民家の屋根

には、自宅の瓦を直す地元の方の姿。矢櫃では、不便と隣り合わせの中で日常の工夫や住民同士の関係性が紡がれている。



矢櫃を育んだ場所

はじまりの場所

長谷川さんの自宅前に広がる浜は、かつて盆踊りや祭りなど、地域住民が一齐に集まる中心的な場所だった。ドラム缶に焚かれた火の周りに大人たちが集まり、子どもたちは一齐に太鼓を叩く。住民同士が家族みだいに一体になる光景が見られたという。

そんな思い出を振り返りながら「住めば都だけど、矢櫃のこれから

を考えたらやっぱり人やな。今は出て行く人はいるけど入ってくる人はほとんどいない」と長谷川さんの本音が滲む。



世代を超えた記憶の重なり

昨年、その浜で30年ぶりに「裸参り」という催事が復活した。地元学生や市の職員といった参加者に混じって、そこに長谷川さんの中学生になるお孫さんの姿があった。

「また来年も来るんちゃうかな」ぼつり、静かに呟く長谷川さん。かつて、ここで育った子どもたちが今は、自分の子どもを連れて年に

「どこから見るかで景色は変わる」
矢櫃中を歩いて、歩いて、長谷川さんが
見つめる矢櫃の日常とこれからの風景

一度帰ってくる機会になつていう。見せてくれた2枚の「裸参り」の写真には、30年前の長谷川さんの姿とお孫さんの姿。一つの催事を通して、世代や環境を超えたつながりが少しずつ生まれはじめている。

「矢櫃でよく行く場所や思い出の場所は？」という質問に「思い出ばつかりやで」と答えてくれた長谷川さん。港ひとつとっても、海水浴のできる浜や旅館街で栄えた断崖絶壁の景色、矢櫃全体を見渡せる場所があることを教えていただいた。「どこから見るかで景色が変わる」という長谷川さんの言葉は、ここでの暮らしそのものではないかと、2時間の矢櫃暮らしから実感するこゝとができた。一言では語れない矢櫃を知るためにも、ぜひ自分自身の足で一度歩いてみてほしい。

取材・文 西尾泉
撮影 笹間千広



～ Profile ～

長谷川 信夫 さん

長谷川信夫さん。68 歳。

2016 年 4 月より自治会の班長を勤め、「くらしちやる矢櫃」の拠点作りにも携わる。昨年、30 年ぶりに復活したお日待ち「裸参り」には娘婿と中学生のお孫さんが参加した。

伝統行事に欠かせない

郷土料理「かきまぜ」

矢櫃地区には代々伝わる「かきまぜ」と呼ばれる郷土料理がある。新鮮な寒ぶりをだしにして、かやくと混ぜ合わせて炊くご飯だ。矢櫃でかきまぜを作るのは、毎年一月の第二日曜日に行われている「お日待ち」のときだけ。初代紀州藩主徳川頼宣公を偲ぶ行事で、地元の70歳以上の人々と来賓だけに振舞われる。

「初めて食べる人には『だしは何ですか?』ってよく聞かれるんですよ。独特な感じだから。でも、おいしい

ですよ。」

り笑って教えて

くれたのはこの

町の元婦人会の

中心メンバーで

ある松尾里美

さんだ。今はナ

デシコ会という女性10人ぐらいのグ

ループで、ボランティアとして矢櫃

地区のサポートを担っている。

実はかきまぜにレシピは存在せず、

作る人の舌だけが頼り。地元の人

だけが知る秘伝のレシピが受け継が

れているのだ。

▼写真説明

お日待ちの時に Rowe れる子供神輿に参加するお子さんとお孫さんの写真。世代をこえて担がれる神輿は、矢櫃地区の大切な宝物。



矢櫃の伝統を支える

松尾夫妻の存在

里美さんは、二人目の子供が生まれる前にご主人の勇二さんの実家がある矢櫃に移り住んだ。看護師の仕事が続けながら、二人の子供を育て上げたそう。仕事と家庭の両立、大変なことも多かったのでは?と尋ねると、「一緒に住んでいた主人の母にも面倒を見てもらっていたから」とほほ笑んだ。

「本当に感謝、感謝。やってこれ

たのは母のおかげなんです」。

お姑さんをはじめとする地域の人

たちの助けは、仕事をしながら子育てをする里美さんにとつととても大

きな支えだった。雨が降りはじめた

ら洗濯物がぬれないように隣近所に

も声をかける、自分のうちの子じゃ

なくても危ないことをしていたら注

意をする。地域のことは、自分ごと。

昔からそういう繋がりが矢櫃にはあ

るし、それは今でも変わらない。

松尾さん夫妻が受け継ぎ、守つて

いるのは伝統だけではないのだ。地

域の人を家族のように見守り、大

切にする心も繋いでいる。

「田舎のいいところは声掛けすると

ころ。矢櫃の人はみんな知り合い。

それが一番いいんだよね、人間的

で。」と、夫の勇二さんが言う、

里美さんも深くうなずいた。当然

のことかもしれないが、夫婦の絆も

深い。





矢櫃の郷土料理「かきまぜ」をつくるのは、
年に一度の「お日待ち」の時だけ。
伝統を受け継ぎ、守ってきた
矢櫃の「お母さん」はどんな人だろう？

矢櫃には

「よそもん」はいない。

「都会やっ
たら隣の人の
顔も知ら
んとかそう
いう感じや
けれども、
ここにいと
他人さんで



も親類みたいな感じよ」と里美さ
ん。矢櫃の魅力はたくさんあるけれ
ど、一番の魅力はここに住む人の温
かさ。「来年、かきまぜをぜひ食べ
に来てくださいね」笑顔で里美さん
が声をかけてくれた。矢櫃の人たち
にとつてあなたは「よそもん」では
ない。

たった一日の滞在でも、きっとそ
れを感じることができるはずだ。

取材・文 三上由香利

撮影 谷畑梨紗

～ Profile ～

松尾 里美 さん



1948年6月生まれ。矢櫃の隣町である宮崎地区で生まれる。二人目の子供の出産前に夫である勇二さんの実家がある矢櫃地区へ。看護師の仕事の続けながら、婦人会メンバーとして地域の活動に尽力。現在はボランティアナデシコ会の中心メンバー。

普段企業で会計の管理もしている私は、自治会の会計ってどんな仕事なのか聞いてみたいと思い、松尾勇二さんに取材をさせてもらった。しかし、松尾さんの話を聞くうちに、「矢櫃の人情味を伝えたい」と思い始めた。

数字でみる矢櫃地区

平成5年には176世帯だったこの地区の世帯数は、今では96軒にまで減少した。

現在の空き家数は約60軒——そんな矢櫃地区の自治会会計の現状を松尾さんに聞くと、やはり世帯

数が減ってきている分、自治会の収入も減少しているそう。その影響で、以前は徳川頼宣公を祭る神社「あたごさん」を掃除してくれた地元の方に、パン2つと飲み物を振舞っていたが、パンが削られ飲み物だけしか振舞えなくなったと心苦しそうに語る。

松尾さんが生まれ

育った町矢櫃地区

戦後まだ間もない頃、6人兄弟の末っ子として生まれ、海と山に囲まれた矢櫃で育った松尾さん。活発な子で、幼少期はいつも海に潜ってアワビやサザエを取っていた。小学生



時代はクラスメートとけんかをするなどし、しよちゅう職員室に呼び出されて先生からビンタをされたりもした。近所の大人から怒られることも多かったが、「そこには信頼関係があるから、全然嫌な気はしなかったよね。」と目を細める。

そんなやんちゃな幼少期を過ごしていた頃、毎日遊んでいると、夕方にはお母さんたちが「ごはんやでー」と呼びに来てくれた。雨が降り始めると、気づいた誰かが「雨やー」と知らせられて、一斉に洗濯物をしまい始める。松尾さんは「そん

な田舎ならではの人情味が好きなんよ」と言う。

矢櫃では、車で家の前まで入ってくるができず、若い頃は便利な地域への憧れから矢櫃を出たいと思ったこともあったが、それでもずっと矢櫃の町を離れなかったのは、この「人情味」が他にはないものだからだ。

矢櫃地区の取り組みと

これから

近年、矢櫃地区に活気を取り戻すため、行政のプロジェクトとして「くらしちやる矢櫃」という移住体験スペースが出来た。さらに、若者が減少した影響で、30年ほど取りやめになっていた、徳川頼宣を偲ぶお祭り「お日待ち」の行事のひとつ「裸参り」も復活。少しずつ若者たちが矢櫃を訪れ、移住してくる方も出てきはしめた。



「朝起きたらやかましいくらいの子どもの声が聞きたい」。

モノではなくヒトとヒトの繋がりが豊かな町矢櫃の自治会会計さん。



「若い人たちがどんどん来てもつと矢櫃に活気が出てほしい。子どもの声が聞きたいね。朝起きたらやかましいくらいの子どもの声が聞きたい。」

そう気さくに語る松尾さんは、矢櫃地区の頼れるお父さんの存在だなぁと感じた。

インタビューした内容を改めて聞き直していると、元ウルグアイ大統領のホセ・ムヒカさんが2012年、リオの国際会議のスピーチの中で語っていた、「貧しい人とは、少ししかもっていない人ではなく、もつともつとといくらあつても満足しない人のことだ。モノをいくら買つても幸せにはなれない。ヒトとヒトとの関係の中でしか人は幸せになれない」という言葉を思い出した。矢櫃地区はそんな素敵なヒトとヒトとの関係で溢れている。

取材・文 石井信行

撮影 東信史

～ Profile ～

松尾 勇二 さん



71 歳。自治会の会計を一任される矢櫃の頼れる存在。雨が降ると、誰かが「雨降ってきたで～！」と伝えてくれる。その田舎ならではの光景が好き。釣りが趣味で、アオリイカのシーズンは毎日釣りに出かける。

地方創生という言葉をよく聞くようになったが、仕事と暮らしが一体となったリアルな話を聞く機会は少ない。向後周一さんは、民間企業のビジネスマンでありながら、有田市役所へ赴任した人だ。地域の現場で働いている人は何を感じ、地域にどんな未来を描いているのだろうか。有田市での取り組みと、地域に求められる人材について話を聞いた。

民間視点を活かした

地域の魅力発信

向後さんはダイエーから2年間の期間限定で有田市へ出向。2016

年から民間の視点とネットワークを活かして、有田市の観光資源の磨き上げに取り組んできた。

有田みかんのブランド力向上では小売業での経験を活かし、顧客との接点づくりのため百貨店やスーパーにて販売イベントを実施。ふるさと納税では返礼品を提供する企業や生産者の顔が見えるよう特設サイトを設け、前年比170%の寄付額を達成した。

また向後さんは市の課題先進地である矢櫃地区で、約30年前に途絶えてしまった「裸参り」の復活にも尽力。自らもふんどし姿となつて1月の冷たい海に入り、1年の健康を願った。祭り当日には男達の勇姿を

一目見ようと地区の住民はもちろん学生、市役所職員などが集まり、「町の祭りが復活して嬉しい」と住民からも喜びの声が届いている。

民間と行政、市と市外をつなぐコーディネーターとしての役割

企業人であり行政職員でもある向後さんに期待される役割は、市役所や住民と企業をつなぐ「翻訳者」だ。「企業・市役所それぞれに独自の用語と商習慣がある。それらの間に立ち、翻訳するのが僕の役割だ」と向後さんは言う。

また市の住民にとっては当たり前の景色や食べ物でも、よそ者の目から見れば原石のように輝いて見えることも多い。その価値を住民に気付いてもらうことも、向後さんの仕事のうちだ。「キラキラとした海や満点の星空は、都市の人にとってはお金を払ってでも見て体験したいこと。

有田市にはみかんの収穫体験や海産物など活性化の芽は多い」と向後さんは観光業の再興に可能性を感じている。

有田市に赴任して2年、数々のプロジェクトを手がける中で向後さんは地域に求められる存在をこのように考えている。「地域には組織の枠組みを越えて、人と人、人と企業・行政をつなぐコーディネーターの存在が必要だ。経営者や行政職員がよそ者視点で地域の魅力を見つけ、つないでいくことが地方創生に求められているのではないか」。



「若者・ばか者・よそ者」はもう古い？
有田市役所 向後周一さんに聞く、
地方創生時代に求められる、地域を救うコー
ディネーターとは

いつかは家族を連れて

矢櫃へ

向後さんと一緒に矢櫃地区を歩くと、行く先々で住民が向後さんに話しかけ、2年の間にすっかり町の一員となったことが伺える。とくに向後さんは、矢櫃地区の風光明媚な景色と町全体が家族のような温かな人柄を気に入ったという。向後さんが任期を終えることを知り、矢櫃地区の住民は「ずっと矢櫃に住んだらいいのに」と残念そうに声をかける。向後さんの方も、その気がないわけではない。「現在は単身赴任で家族を千葉に残してきているので、すぐに移住は難しい。でもいつか矢櫃地区へ移住できたら」と有田市で暮らす未来を描いている。

取材・文 北川由依
撮影 琴地悠太

～ Profile ～

向後 周一 さん

1973年生まれ、千葉出身。大学卒業後、株式会社ダイエーに入社。2016年4月から内閣府の地方創生人材支援制度で、有田市へ出向。経営管理部理事 地方創生推進監・ふるさと創生室長として、観光・産業振興分野での企画立案から情報発信までを担当する。2人の男の子の父。



“面白い”を求めて世界へ

旅をした先に出会った日本

「つけてきたあー！」パーティーカチューシャを頭に付けたお姉ちゃんが勢いよくやってきた。そこに、忍者ごっこをしながらお兄ちゃんもやってくる。二階で鳴いているのはおばあちゃん犬のソフィーちゃんだ。タネムさんのご家族は5人と一匹。先日、3人目のお子様が生まれたばかりだ。結婚をきっかけに矢櫃に引っ越してきた。

タネムさんの大学時代は、現在の穏やかな佇まいからは想像もつかないほど刺激的だ。アメリカで政治学を学んだ後、エジプトで歴史、インドで宗教と、さまざまな国を渡り歩き、その国でしか学べない勉強をしながら世界一周をしたそう

だ。一つの国に対して特別な興味を持った訳ではなかったが、“面白そう”と感じたら動く。10カ国以上住んだ後、まだ訪れていなかった日本に興味を持った。



小さな町だからこそ生まれた不便さを“面白さ”に変える

日本で小中学校の先生として勤務を始めたタネムさんは、同僚の奥様に一目で恋に落ちる。奥様と結婚した理由は、「好きだったから」。国際結婚の壁や文化の違いなど気にも留めてなかったような、シンプルで力強い答えがタネムさんの真つ直ぐな人柄を感じる。新居探しを奥様のご実家の辰ヶ浜近くでしていたところ、歩いてすぐの矢櫃に初めて来た。

矢櫃は空が広く開け、アメリカに近い開放感を感じた。坂が多く、狭い道が続く矢櫃の町は住み難さもあるかと思ったが、不便さのある町に住む“面白さ”の方が勝った。そして、何よりも海が一望できるこの景色に恋に落ちた。現在住む家

も、一人で探検しながら周っていた時に「ここがいい」と見つけたという。矢櫃に住み始めて11年。家の庭を作り、床も張り替え、壁を白く塗った。「DIYはまだまだこれからも頑張らなきゃいけない」とタネムさんは言う。

不便だと思っていた道の狭さは、車が通れないからこそ子供たちにとって安全で自由に遊べる場所となった。顔見知りしかいない小さな町は、住人みんなが子供たちを見守ってくれてとても安全だ。

「奥さんと、この町が好き」自分だけが知ってるアンテナ

夫婦が気に入って住み始めた町を子供たちも大好きだという。タネムさんの“面白い”の直感がすべて幸せな流れに進んでいることに静かに



「『面白い』と感じたら動く」
ワクワクした直感にしたがって辿り着いたのは、
美しい海が一望できる日本の小さな町でした。

ドキドキした。ふと、呟いた「奥さんと、この町が好き」というタネムさんの言葉。
お話を聞くまでは、アメリカ生まれのタネムさんが矢櫃を選んだことには、きつとびつくりするような理由があるんだろうと思っていた。でも、タネムさんから感じたのは、自分だけが知っている”面白い”のアンテナを追い続けてきたら、奥様と恋に落ちて、海が見えるこの町にやってきたという「自然な流れ」だ。自分だけが知っている”面白い”のアンテナを追い続けてみると思いもよらない幸せに出会えるのだ。これを読んでいる方だけの”面白い”が矢櫃に繋がりますように。

取材・文 鈴木亜美

撮影 和田拓也



～ Profile ～

タネム・ジャスティンさん

アメリカ / ミネソタ州出身、41 歳。

25 歳で英語教師として日本に来日し、日本人の奥様と結婚。

現在三児の父。趣味は、読書と運動。

矢櫃自治会班長。イベントで矢櫃地区を盛り上げている。





集落全体がオーシャンビューの

和歌山県有田市矢櫃地区。イタリ

アのアマルフィを思わせる美しい

景観の一方、行き来する道はほぼ

急斜面、さらにその幅は狭く、移

動は歩きか單車のみ。「暮らすに

は不便」と若者は出て行き、過疎

化が進んだ。そんな地区への移住

を決め、妊娠出産を経験、3人の

子育てをしている女性がいるとい

う。これから結婚や出産を考える

女性の一人として、そのリアルな

話を聞きに彼女の住む矢櫃地区を

訪れた。

矢櫃地区は

“美しくあたたかい場所”

結婚当時、睦子さんが希望した

家探しの条件は実家の辰ヶ浜に近い

こと。矢櫃は候補地の一つだった。

もともと同級生が多く、幼少時に

遊びに行っており親しみもあった。

『そしてこの美しい景観を主人も気

に入り、住もうと決めました。』と

睦子さんは語る。

また、矢櫃のシンボルでもある細く

て急な坂は不便である一方で、地

域での助け合いの精神を育み根付か

せてもきた。タネム夫妻がそれを実

感したのは引越の日。町の入口に停

めたトラックから家までは大型家具

も自力で運ぶしかないのだが、地区

の人達は総出で手伝ってくれた。『初

日から、ああ、ここは本当に温かい

場所なんだなあと。来てよかったと

思えた出来事でした』と目を細め

て語る。

妊娠、出産ライフも

工夫次第で不便ではない？

矢櫃での妊娠出産は、そこまで不

便に感じることはなかったと睦子さ

んは話す。初めての妊娠の時は念の

ため駐車場まで坂を歩いていたが、

3人目になるとギリギリまで單車

を使っていたという肝の据わりよう。

また病院に関しては、当時働いてい

たため時間的融通が利き、かつ移

動圏内にある隣の産科にお世話

になった。ただ臨月の時は産気づい

てからこの坂を上がるのは大変なの

で、早めに帰省をし、安心安全な
出産を心がけた。

今、矢櫃の小学生はタネム家族

含め数人ほど。子どもが少ない分、

地区の人みんなが我が孫のように可

愛がつてくれるのが本当に嬉しいと

いう。矢櫃にはない習い事や保育園

も車で約15分の中心街で補えるので

教育面でも不安は感じない。『待機

児童はこの地域にはいないので、働

きながら子育ても十分可能ですよ』

と笑って話す。一方で、子供たちの

遊び相手がいないというのは心配の

種。子どもやママが集まれる場所が

あれば他からも遊びに来てくれるの

だろうけど、同世代の交流がな

かなかできないことに関しては少し

不安を感じている。

だが、矢櫃を離れるつもりはない

と睦子さんは断言する。今は子供

の送迎もあり大変な時もあるが、

大きくなったら手はかからなくなる

し離れる理由もないとのこと。ただ



“この家が台風で壊れない限り、

矢櫃に住み続けたい。”

育児と仕事を両立していた睦子さん。

そんな彼女の矢櫃流子育てライフとは。

この家が古いので、台風で壊れないか、それだけが心配と茶目つ気たっぷりに語ってくれた。

完璧でなくて良い。

いびつな矢櫃が美しい。

子どもに、家族に、自分に必要なものはなんだろう。あつたら良いモノはもちろんあるが、ないモノはないと割り切つて、えいやと他に頼つてしまうことも、矢櫃ライフには必要なかもしれない。そのかわり矢櫃には、矢櫃にしかないモノがたくさんある。睦子さんのように、矢櫃にあるものを慈しみ、人や自然のあたたかさをいっぱい感じれば、一見不便に見える地域でも、唯一無二の場所になるのだろう。

取材・文 生田優希

撮影 堀田紗千

～ Profile ～

タネム・睦子さん

昭和 53 年生。有田市内の辰ヶ浜地区出身。
大学卒業後教師として勤務。結婚を機に矢櫃地区へ移住。
アメリカ人のご主人と 3 人の子供との 5 人暮らし。
夫婦円満の秘訣は小さな不満も溜め込まないこと。



現在、矢櫃で唯一営業している宿泊施設「国民宿舎 くる潮」。社長・古川元康さんに、釣りで栄えた頃のエピソードや、地元民として感じる魅力や住みにくさ、これからの矢櫃に望む事を伺った。

釣り客の減少で厳しくも

移住で感じる活気への希望

釣りスポットとして人気が高い矢櫃で生まれ育った古川さん。両親から釣り宿を譲り受け、国民宿舎くる潮として1979年に開業した。バブル期は大勢の釣り客で賑わい、くる潮を含め6軒あった宿はフル稼

働した。しかし次第に釣り客は減少し、矢櫃に残る宿泊施設はくる潮だけに。古川さんも一時は廃業を考えたが、周りの「くる潮までなくなったらまちの火が消えてしまう」という声に後押しされ、今も営業を続けている。

訪問客の落ち込みは食い止められていないが、最近は矢櫃に移住する人が出始めてきた。住民が矢櫃を離れ、人口が減少する状況は依然続いているが、移住者が増えれば以前のような活気に戻るかもしれない。明るい希望が見いだせそうだと、古川さんは前向きに捉え歓迎している。

住みやすいとは言えないが

家族のような温かさが魅力

集落内は

細く急な
坂道ばかりで、移動

は徒歩かス

クーターのみ。家ま

で車が乗り

入れられないので、大きな荷物も

人力で運ぶしかない。集落には店がなく、街まで行かないとモノが買えず、古川さんは「若い人の住むところやいますわ」と住みにくさを指摘する。

だが、矢櫃の特色である、日差しが降り注ぎ温暖な気候のように、区民が家族のようにあたたかく、のんびり過ごせるのが矢櫃の魅力だ、と笑顔で答えてくれた。都会では味わ

えない人情や時間の流れが、矢櫃には存在するのだ。

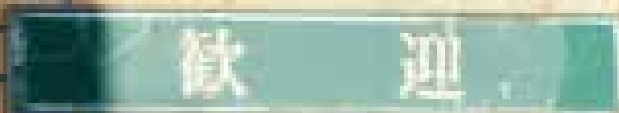
区民に出せないアイデア

柔軟な感性に期待を寄せる

近年、移住交流の場「くらしちゃる矢櫃」の開設など、外部からの訪問者を受け入れる取り組みが増えている矢櫃。そんな動きに古川さんは「光が見えた」と歓迎する一方で、「具体的にどうすればいいかわからない」と不安をのぞかせる。率先して行動を起こす区民が少なく、いいアイデアも出にくいので、外部のいろんな意見を聞きたい、というのが古川さんの考えだ。これらの矢櫃を明るくしたいという思いが強く、「矢櫃で何かをしたい、移住をしたい人に協力を惜しまない。誰かがやってくれたらついていくので、新たな道を作って欲しい」



人も気候もあたたかい矢櫃に新たな風を……
矢櫃地区唯一の宿泊施設を切り盛りする
古川さんが語る、現状とこれからへの想い



とも話してくれた。

インタビューの後、客室や 50 畳の宴会場など館内を見せていただいた。どれも立派で、宿泊や宴会以外に人が集う何かができれば、と思った。

1 階の土産スペースはカフェスペースにできそうだし、かつてゲートボール場だった屋上も、新たなアイディアがあれば有効活用できるだろう。

ここに移り住むなら、アイディアはどんどん投げかけて、区民や矢櫃

に溶け込み活

動をして欲し

い。そうすれ

ば、家族のよ

うなあたたかい

付き合いができ

るはずだ。



取材・文 橋元有理子

撮影 琴地悠太

～ Profile ～

古川 元康 さん

生まれも育ちも矢櫃。現在、矢櫃で唯一営業している「国民宿舎 くろ潮」の社長。

両親から受け継いだ釣り宿を国民宿舎として生まれ変わらせ、今も現役で約 40 年運営している。



憧れだけでは暮らせない

田舎暮らしの理想と現実

東日本大震災以降、「田舎暮らし」や「移住」という言葉を耳にする機会が増え、今では豊かに暮らす田舎ライフ情報が溢れている。

しかし、実際に田舎に移住するということは、メディアが謳うような楽しいことばかりではない。私自身も田舎に住んでいるが、住み始めたときは理想と現実のギャップが大きく、苦労することが何度もあった。

そこで、地域住民の代表である

自治会長を務める古川浩一さんに、「矢櫃で暮らす」ことのリアルをお伺いした。

移住者も受け入れ側も

実は不安を抱えている

今、日本全国の地域で人口減少が叫ばれている。矢櫃も例に漏れず、人口減少や空き家増加という問題を抱える地域だ。それらを解決するために、平成28年度から市のモデル事業として矢櫃で空き家活用地域活性化プロジェクトがスタートした。

宿泊施設「くらしちやる矢櫃」もそのひとつ。実際に矢櫃に滞在して

もらい、矢櫃に移り住むきっかけになればとオープンした。現在は、ふるさと納税のリターンとして滞在してもらったり、大学生の活動拠点として活用されている。滞在者に対しては、釣り体験を用意したり、地域の人とコミュニケーションを取れる仕組みづくりを行い、矢櫃の魅力をより感じてもらう工夫をしているそう。

移住者を増やす取り組みを進める一方で、実は地域の人からは不安の声もあるのだとか。「どんな人が来るんか分からないのじゃあ、それだけが不安。来て歓迎するんやけども、こういう人なのか不安材料ちゅうんか」と古川さん。

もちろん、移住を考える人にも「どんな町なのだろう？ 地域の人に受け入れられるのだろうか？」など、さまざまな不安がある。しかし、実は地域の人も受け入れることに不安を覚えているのだ。

矢櫃地区内は車が入れない。細い

路地はすべて坂道。晴れていれば穏やかな海は、台風ときには脅威に変わる。横殴りの雨のときや、風が強いときは家から出ることができないほど。自然の脅威と隣合わせの生活は、思い描く田舎ライフとはほど遠いかもしれない。

矢櫃には、この地を拓いた徳川頼宣を祀る「お日待ち」という行事がある。その祭りのひとつである裸参りは、参加する若手がなく途絶えていたが、再開を望む声が多く平成29年に復活を果たした。裸参りには、地元の人でなくても参加できるように、大学生や市役所の職員などが参加している。

その祭りに参加することが、矢櫃を知るきっかけになるのではと古川さんは話す。「この町で75年住んでいると、みんな兄弟のようなもの。町全体が家族のような関係でそこが矢櫃の好きところです。まずは矢櫃に来て、地域の人と触れ合ってほしい」。



楽しい田舎暮らしは苦勞の先に待っている？
矢櫃の自治会長を務める古川さんに聞く、
ゆるやかな移住のカタチ。



少しずつ心の距離を縮める 新しい「移住」のカタチ

いきなり「移

住」をするこ

とは、移住す

る本人はもち

ろん受け入れ

る地域の人達

にも少なから

ず不安があるもの。しかし、緩やか

な関係の中でコミュニケーションを取

りながら、少しずつ心の距離を縮め

ていくことが、結果的に「移り住む

こと」に繋がるのではないか。

住まいを移すことだけでなく、そ

こでの暮らしを体験し、住む人と心

を通わせることも「移り住む」こと

なのではと、新しい「移住」のカタ

チに思いを馳せた。

取材・文 たちばなりえこ

撮影 其田有輝也



～ Profile ～

古川 浩一 さん



昭和 17 年矢櫃生まれ。矢櫃で暮らして 75 年の生粋の矢櫃人。平成 1～2 年の 2 年間と平成 13 年から現在までの約 19 年間、矢櫃町自治会の会長を務める。長年選挙で選出されるほど、地域の人からの人望が厚い。

～ 旅を終えて ～



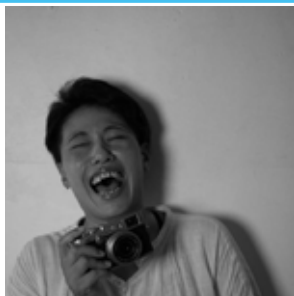
私の好きな町です！
思い出したら和やかな気持ちにさせてくれる、お日様みたいな笑顔にたくさん出会えました。早くまた行きたい。
太田 真里亜（堺市）



穏やかな海と高い空、そして矢櫃のみなさんのあたたかな心が、私の心を癒してくれました。
北川 由依（京都市）



海と空の間に暮らす矢櫃のみなさんの物語が、写真と言葉で編まれていくうれしい時間でした。あの日矢櫃にいたすべての人に感謝◎
杉本 恭子（京都市）



こんな素晴らしい場所があったなんて…今まで知らなかったのが悔しいぐらい。きっと興奮するから一度訪れてみてください！
橋元 有理子（京都市）



深呼吸したい時に思い出す景色が一つ増えました。
歩いて、ひと休みして、ぜひあなただけの矢櫃を見つけてください。
西尾 泉（加古川市）





海と人の優しさに包まれたとても素敵な場所でした。釣りや写真が好きな方は絶対に楽しめるはず。是非訪れてみてください。

其田 有輝也 (京都市)



ここにしかない、歴史や暮らしがあり、人の繋がりがありません。是非、一度足を運んでみてほしい場所です。

東 信史 (京都市)



気持ちよく晴れた空に穏やかな海。ここは、まっさらな気持ちになれる場所。歩いたっていいじゃない。ありがとう、矢櫃、またね。

西塔 藍 (香川県)



迷路のようなまち、矢櫃。ここにしかない暮らしがある。大変さがある。幸せがある。是非、足を運んでみて、矢櫃だからこそ見える景色を感じてみてください。

堀田 紗千 (京都市)



綺麗な海や町を一望できる景色。小さな町ですが、色んな表情のある素敵な場所です。インタビューにも快くお応え頂き感謝です。

琴地 悠太 (京都市)



澄んだ空気と青い空、そして人々の温かい笑顔。一度訪れたら、秘密の場所にしておきたいくらい、とっても魅力的なまちです。

谷畑 梨紗 (有田市)



初めてなのにどこか懐かしく、そしてまた帰りたくなる場所。優しい矢櫃の人々と豊かな自然は心の原点に立ち返らせてくれました。また必ず戻ってきます。

和田 拓也 (大阪府)



道ですれ違う他人のはずの私にも「おはよう」「よく来たね」。人の優しさに出会える町、矢櫃。この町の魅力がたくさんの人に伝わりますように。

三上 由香利 (京都市)



ふっと心が落ち着く、穏やかな場所でした。暖かく迎え入れてくださった皆さんに感謝です。また遊びに行きます。

立花 莉絵子 (姫路市)



まち全体が大きな家族のように繋がりが合い、自然と共に暮らしている矢櫃の人々。不便さや大変さを超える、心地よさがそこにはありました。

笹間 千広 (鳥取市)



人と人の繋がりを覚えることができる矢櫃地区。2日間という短い期間でもそれを感じることができました。

生田 優希 (大阪府)



真っ青な空ときらきら光る海。そして、矢櫃の皆さんの温かい笑顔が忘れられません。またすぐ会いに行きます。

鈴木 愛美 (京都市)



有田市移住交流拠点施設 くらしちやる矢櫃

海に見えるまち矢櫃につくられた、移住交流施設「くらしちやる矢櫃」。利用者に矢櫃の暮らしを体験してもらい、素晴らしい海の景観や美味しい海の幸などの魅力を知ってもらうことで、将来的に移住を考えるきっかけの場となることをめざしています。

◆ご利用案内（お試し居住）

- ・一棟まるごとお貸しします。
※連続して5日間の利用が可能
- ・ご利用の際は、施設使用料 2,000 円 + 1 人 2,000 円/泊頂戴致します。
※現金のみ・小学校就学児 1 人 1,000 円/泊
未就学児は無料
- ・鍵の貸出返却及びチェックイン・チェックアウトは国民宿舎くろ潮（有田市宮崎町 1562）にて行います。
- ・国民宿舎くろ潮でシーツのレンタル（1 人 1 セット 300 円）が必要です。

◆くらしちやる矢櫃

住 所：和歌山県有田市宮崎町 1711-2

連絡先：有田市役所経営企画課まちづくり係

TEL 0737-22-3731

HP：https://www.city.arida.lg.jp/kurashi/sumai/1001037.html

- ・お車でお越しの際は、阪和自動車道の海南 IC、または有田 IC で降りて、国道 42 号をご利用ください。各 IC からは約 25 分です。
- ・また、電車をご利用の場合は、JR きのくに線特急くろしおで、天王寺駅から箕島駅まで、約 1 時間です。箕島駅からは、タクシーまたは有田市デマンドバスをご利用ください。

泊まる、集まる、あったまる。
くらしちやる矢櫃。

